神戸新聞　1976年10月26日

論壇時評

建元正弘

<11月号>

「あすの中国」に照準

公など中央論な　見事な〝クーデター予測〟

◆毛沢東で多彩な編集

「文芸春秋」のマーク・ゲイン＜毛沢東の偉大と悲惨＞は「毛以後の指導体制は、誰（だれ）一人としてこれだけの規模と複雑な事情のある国を率いるだけの資質もなく、反目と策略にうず巻く、六人の男と一人の女性とから成るに至った」と指摘した。

彼らのうち、「わずか九年前までは一工場で…闘争に熱を上げ…ていた若い紡績工」（王洪文）と「上海の二人のジャーナリスト」（張春橋と姚文元）と「二人の女性」（江青）の「大乱四人組」の逮捕が伝えられる今日である。

周恩来という鋭い政治家と毛沢東という偉大な革命家を失った中国はどこへいくのか？　と、今月の各誌は毛沢東記念号ともいうべき多彩な編集を競い合っている。

一番早く取り上げたのは「エコノミスト」9・21号の座談会（小島麗逸・矢吹晋・陸井三郎）＜毛沢東主席の死と世界＝文革路線は変わるか＞だが、「中央公論」は＜毛・周を失った中国の新路線＞「潮」は＜〝中国の紅い星〟と日本＞＜「現代の眼」は＜続・ポスト毛沢東＞「諸君！」は＜毛沢東の死＞「朝日ジャーナル」9・24号は＜毛沢東＝人・思想・革命＞「東洋経済」9・25号は＜毛以後の中国と世界＞を、それぞれ特集しており、「展望」も毛沢東についての二つの対談を載せている。このほか「世界」も大江健三郎ほかの追悼記を載せた。

◆今政変を予知した二人

なかでも「中央公論」の鹿沢剛＜鍵を握る人民解放軍の内幕＞の書き出しは「一九七六年十月のある日」江青・姚文元・王洪文らが陳錫聯北京軍区司令によって制圧されるというフィクションで始まっており、今度の政変を一カ月前にぴったりと予知していてお見事！というほかない。

そういえば、江青ら「上海グループ」の失脚の可能性を既に本年四月、天安門事件当時から予測していた人がもう一人いる。中嶋嶺雄（「朝日ジャーナル」4・16）である。当時、中嶋は天安門事件で「真のマルクス＝レーニン主義を骨抜きにしようとして、ハサミを振り回すやから」とのスローガンが表れたことを「毛体制下において政治を〝私物化〟している」江青への明白な批判だと重視していた。

中嶋の＜毛沢東体制は解体する＞（「朝日ジャーナル」9・24）や＜毛沢東時代への訣別＞（「諸君！」）は上海グループと陳錫聯、許世友、李徳生、李先念などの「黄安県グループ」の権力闘争を分析し、鄧小平の再復活の可能性も指摘している。

中嶋が政変後に書いた＜非毛沢東化が始まった＝北京政変・文革派失墜と華国鋒主席就任＞（「朝日ジャーナル」10・22）は「周恩来の死にたいしては弔辞を読んだ鄧小平が葬儀の司会者・王洪文らにやられ、毛沢東の死にたいしては弔辞を読んだ華国鋒が逆に葬儀の司会者を「喪主」（江青）らとともにやってしまったことになる」といい、過去一年来、中国では「算賬」（スアンチャン＝総決算）という言葉が「文化大革命のカタをつける」という意味をもって広まっており、「毛沢東の死は、まさに〝解き放たれた死〟なのであった」と述べている。

◆新島淳良のユニークな論点

中嶋が九月号の「中央公論」で再構成した＜天安門事件＞によると、広場には「冷ややかにみる、淫らなイデオローグたちが妖しい風を吹きちらす…」（妖は姚文元の姚と同音）という毛沢東の詩のパロディーや、「四つの現代化（鄧小平が激しく非難された工業、農業、国防、科学技術の近代化を指し、周恩来の政治的遺言でもある）なり日には、われら酒を供えて祭らん」という詩が張り出されていたともいう。

「現代の眼」の新島淳良＜毛沢東思想集団と毛主席の死＞は毛沢東思想集団が「墨子」にあたる毛子に率いられ、「墨経」にも比すべき語録を読み、儒者の支配者イデオロギーを排し、階級的立場（墨家は工人階級集団）に立ち、人類の相互愛と非攻（覇権の否定）を主張する点で、墨家集団と類似するという、ユニークな論点を展開している。

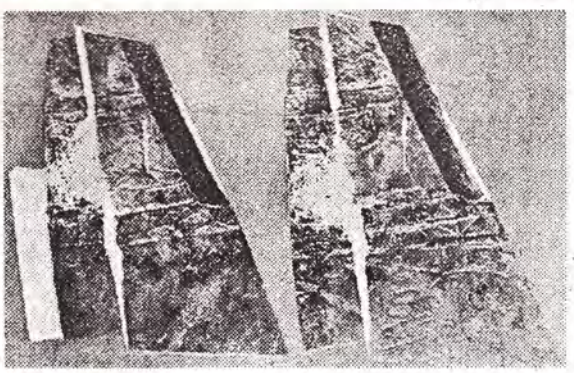
決定的に違う点は墨家が天や鬼神に「義」を期待したのに対し、毛思想集団は「法」とその施行を保障する武力によって「義」を地上に実現できる「法家」に転化したことである。反体制集団であったものが体制そのものを手に入れてしまった。まさにそのとき、毛沢東思想「集団」は毛個人を離れて「物質刺激」的、「実権派」的独り歩きを始めたのである。困ったことに同時に毛個人の威信も空前に高まってしまった。文革直前の彼がいかに孤独であったかは「潮」のアンドレ・マルローの＜遠方の二、三の友と共にあるのみ＝毛沢東会見記＞を読むとよくわかる。

新島によると、このときの毛は法家が墨家の心を持ったような矛盾した状態にあった。党幹部からみれば営々として築き上げた国家と党の「法家」組織を「紅衛兵をつかってメチャメチャにしてしまう毛主席は困った存在である」。即刻死刑に処すべきだが、相手が毛主席ではそうもいかぬ。「このおっさんが生きているかぎり、いつまた文化大革命の混乱がおこるか知れたものではない…集団としては毛主席の自然死をのみ待ちわびていたのだ。いま毛主席は死んだ」。

マーク・ゲインによれば「毛沢東は一人の巨人であり、偉大なる反逆者、そして民衆に魔術をかけることのできる男」「自分に匹敵する力量のある人物（彭徳懐、彭真、劉少奇、林彪、鄧小平）に不信感をもつ男」だったという。「継続革命」「社会主義内部の階級闘争」…彼はもう一度生まれ変わってもやはり革命をやると言い出すに違いない。

もう一人の中国研究家竹内実は＜中国にとって毛沢東とは何であったか＞（「東洋経済」9・25）、＜革命の詩人＝その巨大な人間像＞（「朝日ジャーナル」9・24）野村浩一との対談＜毛沢東思

学芸



「相似」

作品　迫る東洋の〝幽玄性〟

ブラジル帰りの「若林和男個展」

ブラジルで活躍している神戸出身の洋画家・若林和男さんが、十五年ぶりに帰国、大丸神戸店四階美術画廊で個展を開いている。

若林さんは二紀会のホープだったが、昭和三十六年ブラジルに帰化。向こうの画壇をリードする存在になっている。

作品は二十四点。コラージュの技法を駆使して部分的に盛り上げた画面は、造形がたくましく、色彩も美しい。静かにとぎ澄ましたり、激しく燃えたりする作者の心象を見るような抽象だ。無限の広がりを感じさせる空間から、東洋の幽玄性が迫ってくる。二十六日まで。